

好きになれる自分を目指して



東邦大学医療センター 佐倉病院 心臓血管外科

齋藤 綾

「これまで辿ってきた過程や今の自分の姿を医学部生の頃に想像できていただろうか。」

横浜市立大学医学部卒業後20年以上の年月を経て時々こんなことを考えます。

中学校・高校の頃は英語が好きだったこともあり漠然と

国際的な場で英語を使い仕事をすることを想像することが多かった中で、一番の親友を失ったことが影響して医学部に進学を目指すことになりました。

医学部在学中は白衣を着て病棟実習に参加していても「将来の自分の医師像」はなかなか想像できずましてや心臓手術をしている姿などは意識の中にはありませんでした。

心臓血管外科医を目指そうと思うきっかけは人工心臓・人工心臓に関する講義を聴講したときからでしたが、脳死移植法制定に向けての議論が炎上していた時代背景とも重なり臓器移植も含めた心臓外科治療に目が向くようになりました。また器械開発などの話にも興味を抱くようになり、学生の頃から外科医、特に academic surgeon になることを意識するようになりました。当時は女性が外科を専攻する上での受け皿が非常に小さく、また、現在のように性別に関らず同じような経験を積むことが出来る卒業後研修プログラムは存在しませんでした。境遇や性別が得られる経験に大きく影響する時代でもあり、術者を経験する機会も回ってこず逆風の中ともいえる状況下で心臓血管外科医を目指し続ける自分に対し「意地を張りすぎているのではないか」「将来心臓外科医の専門医にはなれないまま下働きだけで終わるのだろうか」と自問自答し続けた時期が長く続きました。しかし、迷いながらもある程度自分の目指したい方向が定まっており真摯な気持ちで人の助けを求めることで、各局面で力強く引き上げてくださる指導者にめぐり合うことが出来てきたことを今にして気付かされます。

「Academic surgeon でありたい」・「心臓血管外科専門医として仕事を続けたい」・「国内外を問わず仕事をしたい」など抱き続けていた希望は、大学院での研究生活、カナダへの臨床留学、外科専門医・心臓外科専門医・修練指導医取得・様々な国際学会参加などを通して数十年もの年月を経ていくつかは叶い自分の目指す医師像として漸く形になりつつあります。

医師という職業を考えれば低収入で仕事も決して楽ではなく「順風満帆」とは言いがたい日々を送っておりましたが、自分自身が選択した目標のためと思うと苦労も後の笑い話になるかなと（気持ちに余裕があるときは）考えることが出来るようになっていました。引き続き医師としての仕事については同

じ志で自分の夢に向かう後半戦に挑みたいと考える今日この頃です。

自分自身がおかれた時代では、仕事のキャリアを積むことに一生懸命になったことは反面で「人として生活していく」機会から遠ざかることになった現実も否むことは出来ません。女性にとって仕事と生活の両立が女性にとって困難な時代は漸く変化の局面を迎え、これから仕事・家庭を両立しようとする女性を積極的にサポートしようとする社会が生まれつつあり大変心強い限りではあります。様々な生き方が許容される社会においては過度に他者に対して競争意識を働かせることなく個々の生き方を追求しやすくなることも期待できます。

これから医師を目指す方や研修医生活を送られている先生方、若しくは臨床研修が一段落ついて次のステップを模索している先生方へは是非固定観念に縛られない自由な生き方、他人と比べることなく自分自身の生き方を思い描いて前へ進んでいただけよう応援していきたいと思います。